

「実り」と「成長」

詩篇 92 篇 12, 13 節

今日のメッセージのタイトルは「実り」と「成長」で箇所は詩篇 92 篇 12 節「正しい者は、なつめやしの木のように栄え、レバノンの杉のように育ちます」です。そう、これは今年 2021 年の教会のテーマであり指針聖句です。今年もはや前半が終わり、すでに後半に入っています。今朝あえてこの箇所を取り上げましたのはこのテーマがお題目に終わることなくテーマの通りに内実を伴ったものとなるようにとの願いからです。

聖書は、神に信頼する正しい人々をなつめやしの木、レバノンの杉にたとえています。年老いても衰えることなく、豊かな実を結ぶ姿が「なつめやし」に、神の祝福を受けて、世を去る日まで霊的に成長していく姿が「レバノンの杉」にたとえられているのです。

実を結ぶこと

「なつめやし」は、聖書の舞台になっている中東に昔からあった木です。なつめやしは、たくさんの実を実らせ、その実が重くなると、垂れ下がってきて、木のまわりに鈴なりになります。なつめやしは、砂漠のオアシスに生えており、砂漠を旅する人たちは、なつめやしの実、デーツを食べて、過酷な砂漠の旅を耐えました。デーツには多くのミネラルや、食物繊維、ビタミンなどがバランスよく含まれています。さらになつめやしの幹や葉は、乾燥させて家の屋根にし、樹木の繊維からは縄を作りました。なつめやしは、利用価値の高い樹木です。

神は、神を信じ、神に従う者に、なつめやしに例えられるように豊かな実を結ぶことを期待しておられます。どんなに長い人生を送ったとしても、そこに実が結ばれることがなかったら、なんとむなしいことでしょうか。主イエスは弟子たちに「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るため…です。」ヨハネ 15:16 と言われました。その意味は主イエスは弟子に、それはクリスチャンである私たちにということでもあるのですが、実を結ぶことを期待されているということです。

では、この「実」とは何でしょうか。一般では実を残すというと財産や仕事の成果をあげることをイメージするかもしれませんが。しかし聖書がいう「実」は霊的なものです。財産や名声、業績などといったものは、永遠には残りません。そうしたものはやがて消えていきます。しかし、「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。」コリント第一 13:13 とあるように、神のことばによって養い育てられた信仰は、いつまでも残ります。信仰の強さ弱さの問題ではありません。植物の種に例えられるでしょう。どんな小さな種でもあるか、ないかは結果において決定的な差を生み出します。私たちは「信仰」という、いつまでも残る実、他の人に感化を与え、次の世代に引き継ぐことのできる実を結びたいと思います。信仰は信仰を持つその人にとって力となるだけでなく、他の人をも変えていく力になります。信仰から希望が、希望から愛が生まれます。信仰がなければ、希望の実も、愛の実も結ぶことはできません。私たちは、まず、信仰の実を結び、多くの人にそれを分け与えるものになりたいと思います。

成長すること

神は、また、神を信じるものに、霊的な成長を求められます。木の寿命は、環境によって大きく変わります。レバノン杉は杉の中でももっと寿命が長いとされ 1000 年から 1600 年も生きるそうです。しかも、木は、その命が尽きるまで、絶えず成長し続けます。杉の木は年輪を加えるにつれて、根を張り、枝を広げ、天に向かって高く伸びるのです。神を信じる者も、同じように、その生涯の最後まで霊的な成長、信仰の成長を求めていきます。

確かに、年齢を重ねると、記憶力は衰退します。聖書のことばを、若い時のように暗記するのは難しくなるでしょう。けれども、聖書を学ぶというのは、たんに聖書の知識を詰め込むことではありませんから、たとえ記憶力が衰退しよう、長い人生の経験によって、また、神との交わりの積み重ねによって、神のことばを若い時よりもより深く理解できるようになるはずで。私は、若いころは、神学校で教わったとおり、聖書をヘブル語やギリシャ語で読み、文法や単語の意味を調べて、できるだけ正確に、そのことばの意味を理解しようと努めてきました。そのような努力は今もしていますが、年齢を重ねてからは、書かれたことばの意味だけでなく、どんな気持ちでそのことばが書かれたのか、神はなぜそのようなことばを書き記したのかに重点を置いて考えるようになりました。聖書を分析し、解釈し、新しいことを発見するという喜びだけでなく、みことばを黙想し、それを味わうという喜びを体験しています。これは、年齢を重ね、経験を積むことによって与えられた恵みだと思っています。

どんな木もやがて寿命が来て、枯れていきます。時が来て、その場所から取り去られる時がきます。しかし、その実は残ります。実の中には種があり、種の中にはいのちがあります。信仰によって撒かれた種は、あなたの家族の中に、多くの人々の中に芽生え、ふたたびそこで実を結びます。レバノンの杉は切られても、つまり木としての働きを終えても神殿の材料として生かされました。神が与えられた人生を、最後まで、信仰の成長を求めて生き抜いた人は、神の家である教会をささえる、柱となり、梁となることのできるのです。何ができる、何もできない、そのようなことは問題ではありません。キリストへの信仰を持ち、神を愛して生きている、それで十分です。たとえ、その人が天に帰られたとしても、その人が残っていた信仰は、教会を支える柱となり、梁となるのです。

キリストに根ざす

最後にどのように実を結び、成長してゆくのでしょうか？ それを週報にあげました今週のみことばコロサイ 2:7 から見ておきましょう。「根ざす」という表現では、キリストを信じる者が大地に植えられた木にたとえられています。その大地はキリストであり、キリストに根ざすなら豊かな実を結ぶようになると約束されています。また実を結ぶということは成長しているということです。木が実を結ぶためには、大地にしっかり根ざし、大地から養分を得て育たなければなりません。そのように、私たちの信仰もキリストに根ざしていなければならないのです。

「根ざす」ということを言い換えると「信仰を堅くする」となります。今朝の箇所の最後に「信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい」とありますが、「信仰を堅くする」というのは、キリストに「根ざす」ということを別の言葉で言い換えたものです。木の根は、地中に隠れていて、人の目には見えません。しかし、木が高く伸びるためには、根も深く伸びていなければなりませんし、木が枝を広く張るには、根も広く張っている必要があります。みことばを霊の糧にし、祈りの中でキリストとのまじわりを持つという部分は、奉仕や活動と違って、人目には触れない部分です。しかし、それなしには、私たちの信仰は成長して豊かな実を結ぶことはできません。信仰の歩みや教会生活を空回りではない、ほんとうに実りあるものとするため、「キリストに根ざす」ことに心を向けていきたいと思えます。同じ節のもう一つ、「建てられ」とは、信仰を持った者が神の家として建てられることが言われています。「あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい」ペテロ第一 2章5節。

初代教会は、迫害の時代に礼拝の場所を奪われました。それで、クリスチャンたちは、あるときには野外で、あるときにはカタコンベ地下墓所で集まり、そこを礼拝の場所としました。神が住まわれるのは木

や石で作った建物ではなく、「生ける石」であるクリスチャンひとりびとりの中であり、クリスチャンが一つ心で礼拝をささげる礼拝の中であるとの確信があったからです。私たちは五感を持っていますから、教会の建物もまた、神のきよさや恵み深さを表わすもの、礼拝や祈りのために整えられたものであって欲しいと思います。その意味においては恵まれています。けれども、たとえ、建物が不十分であっても、今でしたら一堂に会せなくてもまごころから神を信じ、神を愛する人々の集まりの中に神は住まわれます。問題を抱えた人が救い主の前に重荷を下ろし、心に傷を受けた人がいやされ、弱り疲れ果てた人が強められ、より確かなものを求めている人が真理に出会うところ、それが神の家です。クリスチャンひとりひとりが、神の家のそれぞれの部分となって神の家を建て上げていくのです。私たちも、ここに神が住まれ、人々がここで神に出会う、そんな神の家となっていきたいと思います。